第261号　（昭和41年7月18日第3種郵便物認可）　言論人　昭和50年2月15日発行　（2）

中国新体制の光と影

—訪中雑感をまじえて—

中嶋嶺雄

去る一月八日、長い汽車旅の途次、ゴビの砂漠がなお連綿とつづく内モンゴルの国境駅・二連に単身入境した私は、さらに一昼夜かかって瀋陽、大同、張家口を経、翌一月九日に北京へ到着した。文化大革命の激動期に中国を訪れて以来、八年ぶりの再訪であった。こうして私は一月十四日に中国民航機で上海経由帰国するまで北京に滞在したのだが、街の表情という点から文革期の北京とくらべたら、すべてが平静化し、正常化していたといってよい。その北京ではちょうど私の滞在中、全国人民代表大会の予備会議と中国共産党十期二中全会、そして懸案の第四期全国人民代表大会が開かれていたことになる。このように重要な一連の政治的儀式が北京でおこなわれていたにもかかわらず、北京の一般市民は、もとより事後にならなければその事実を知らされないのだが、そもそも、これらの政治的儀式に庶民がどれほど関心があるのか。すでに全国人民代表大会の開催が迫っていることを明白に実感できた私は、可能なかぎりの知覚を働かせてサーベイを試みたが、それはまさしく「帝力於我何有哉」といった感じであった。林彪異変にせよ、十全大会にせよ、つねに事後に〝真実〟を知らされるのであってみれば、われわれ外部世界の人間が中国の政治的ドラマにたいして抱くような関心そのものがタブーなのであるし、『人民日報』にしたところでそれを毎日読む者はごく限られた層なのであるから、ましてや全人代や新憲法がどうなろうと、それは彼らの日常性の範疇に存在する事柄ではなかろう。これはある意味で、きわめて正常なことではあるまいか。

異常なのは、わが国の方である。たしかに、全国人民代表大会は十年ぶりのものであったし、新憲法も決まったのであるから、大きな出来事には違いないが、冷静に考えれば全人代は本来、毎年開くべき国会なのだし、しかもこれまでの全人代とは違って、それはすでに最高国家権力機関（旧憲法）ではなく、中国共産党の全一的な指導下の国家機構にすぎず、憲法といっても、それは中国の「根本的大法」（毛沢東）なのであり、一種の政治的マニフェスト（宣言）であるにすぎないのだ。それなのに、わが国ではまるで中国の天下国家がひっくりかえったかのような大騒ぎ（少なくとも新聞をみるかぎり）である。再び冷静にふりかえれば、中国はこれまで憲法を遵守することになんらの意味を見出してこなかったし、毛沢東はしばしば全国人民代表大会で決議されたことと正反対のことを、極端な場合はその決議の翌日から大衆運動のかたちで発動もしてきた。前回も、前々回も、毛沢東は全国人民代表大会で挨拶も演説もしていないし、その出席さえ定かでなく、代表の名簿に名前が載っているだけである。だから、今回、毛沢東が全人代に出席しなかったことそれ自体は、ニュースにも値しないのである。それがいつのまにか大ニュースになって憶測を生むのは、それなりの理由があるにしても、このところ中国問題となると右も左も、親北京も親台北もいささか冷静さを失っているので、ついつい全人代そのものにたいする評価の基準が誤ってしまっているように思われてならない。

それにしても謎は残る、と人は訝るだろう。多くの在外公館員や優秀な日本人特派員が見守る北京で、二八六四名もの代表が人民大会堂に参集したというのに、閉会のときまでそれがわからないのはなぜか、それほど秘密にしなければならないのはなぜか、と問われる読者も多かろう。だが、残念ながら、そのように問うこと自体、すでに誤った中国認識に汚染されているのだと、私は冷たく答えざるを得ない。なぜなら、まず第一に、中国が誇る今日の北京の地下道を考えてみていただきたい。それはすでに全市にわたって網の目のように張りめぐらされており、人民大会堂はじめ、主要な個所にはすべて通じているのである。だから今回の全人代についての新聞公報、周恩来報告、張春橋報告がすべて引用している「毛主席の深く地下道を掘り、……」という方針に応えるためにも、大会代表は地下道を通らねばなるまい。閉会まで秘密を守るべきことも当然である。なぜなら、党中央に巣食った反賊・林彪とその一味は、こともあろうに毛主席でさえ暗殺しようとしたのだから、いたるところに〝階級敵〟が存在する中国において、秘密は断固守られねばならない。外国首脳の訪中時にさえ、中国では危険を想定して警備の初歩的な機械化さえ慎んでいるではないか。北京の特派員諸氏は教えてくれないけれど、市内随一の眺望が楽しめる小山がある故宮のうしろの景山公園やその脇の有名な北海公園は、中南海に近いがゆえに今日、一切立ち入り禁止であり、北海の池にかかる橋には厳重な鉄柵があって、日夜、警兵が三十メートル間隔で立っているではないか。このような事実を無視して、なぜ秘密にするのかと問う方が誤っている。

いかに市民の表情が落ち着いて平静化していようとも、このように北京が厳しくも激しい政治的ドラマの世界であることには変りはないのである。

ところで、先に私は、今回の北京滞在中、全人代の開催が迫っていることを明白に実感できた、と書いた。もとより私も、帰国後その開催を知ったのであるが、すでに北京に滞在中、いくつかの状況証拠にぶつかり、そのことを帰国直後に親しい記者や関係者には述べておいたが、たとえば民族飯店に宿泊中の商社員は一月十三日、すべて新侨飯店に移されてきたこと、私の滞在中も人民大会堂には、つねに堂内の一部に電灯がともり、警兵があちこちにいたことなどのほか、帰国前日に外貨がほとんど行かない旧鼓楼大街一帯を歩くと、その一角だけ樹あとも生々しく青、黄、緑のステッカーが張り出されていて、そこには、「実際行動によって第四期全人代の開催を迎えよう」とも書かれていたのである（詳しくは拙稿「モスクワ・ウランバートル・北京」『中央公論』三月号およびグラビア「北京八年目の発見」『週刊現代』二月十三日号、参照）。もっとも北京でそのことを一特派員に話したら、「鼓楼って、どこですか」と質問されたのには驚いてしまった。いうまでもなく、「老北京」には懐しいはずの古都北京の庶民情緒が残る一角の旧い楼閣である。

さて、本題とは大部はなれてしまったので、以下、中国の新体制についての私の見解を述べなくてはならない。

私は、今回の新体制を、「毛沢東以後」の時代への歴史的移行期にそなえようとした実務派官僚体制の再編だとみなしている。そして、今日の中国においては「政治第一」の「大衆国家」（The State of Masses）的雰囲気がすでに消滅しつつあり、経済活動を中心とした国家建設と生活向上への強い要求が社会の底流に強く根づきはじめていることこそ、このような体制を形成せしめた背景であると考えている。この点で、「批林批孔」運動は、『人民日報』や『紅旗』が印象づける雰囲気とは大きく異なって、それが文化大革命のような大衆運動として盛りあがっている状況を私はついに見出すことができなかった。明らかに周恩来批判が意図され、他方では毛沢東側近体制への鋭い批判が交錯した「批林批孔」運動は、こうして昨秋来、当初の路線闘争的性格を大きく変質させて今日にいたっており、最近ではその論調はますますスコラ哲学的なものになってきている。そして、「批林批孔」運動の当初の根本精神であった「反潮流」、「反復辟」という言葉は、いまや完全に消滅し、今回の全人代諸報告では、十全大会当時、王洪文報告をはじめとしてあれほど鼓吹された「反潮流」という言葉をついに探し出すことができないのである。しかも、「反復辟」どころか、鄧小平をはじめ新しい国務院人事の大半は「復活」幹部なのである。つまり「反潮流」運動の挫折のあとにこそ、今回の新体制が形成されたのであった。

だが、今回の新体制は、党の一元化指導体制を明白にし、党・軍・政を一元化して形式上は党主席の統帥権が貫徹することになったが、そうしたタテ型支配の構造と実務官僚層の厚いヨコの壁との構造上の矛盾は依然として残らざるを得ない。そして、鄧小平、張春橋といった実務能力にすぐれた党官僚が、毛・周体制下の後継布陣を担うかに見えるのだが、形式上は党主席にすべての権力が集中しているふりをしているにすぎない」と言っている。そして「人々が自由に呼吸することを妨げ、これまで血を流させてきたこのイデオロギーを投げ捨てよ」と主張するのである。

そしてどうするのか？　ソルジェニツィンは西欧の民主主義にも反対で、これは「四年毎にくり返えされる気違いじみた選挙、無節操な報道の横行、キャスティング・ヴォートをもった少数党の横暴」などの欠陥があって支持できない。それよりもロシアでは専制主義がよいというのである。「千年にわたってロシアは専制主義の下にあったが、この専制主義には真正のロシア正教による強固な道徳的基礎があったから、二十世紀初頭でも国民の肉体的・精神的健康が保持されていた。これに対しロシアにおける民主主義は、モスクワ大公国時代の国会、初期のコザック、農村共同体（ミール）等の伝統はあっても、十九世紀知識人の努力は失敗し、二月革命によって成立した臨時革命政府の民主主義も八ヵ月しか続かなかった」

だから「われわれが欲すると欲しないとにかかわらず、ロシアは専制主義の下に運命づけられているのではなかろうか。すべては専制主義の質にかかっている。専制主義が耐え難いのではなく、それらと日々結びついているイデオロギーのうえ、専横、無法などが耐え難いのだ」と言い、「イデオロギーと党の支配を止め、ソビエト（協議するという意味）制度の実権の一部を復活させ、現支配者が求める通りの支配体制をソビエト制度の中に移し、内政上の困難を解決していくことを提案する」とソルジェニツィンは提言するのである。

このように言いながら、彼は階級憎悪に基かない、友愛の専制を「より自由な制度」と呼ぶのであるが、現在のソ連において、すでに共産主義というイデオロギーが、形骸だけの根なし草になっていることだけは、二人の思想家によってはっきりと証言されているように思われる。

（原書房社長）

ソルジェニツィンとサハロフ

成瀬恭

「言論の自由」を求めての反体制運動であるにかかわらず、一人は外国に追放され、一人はモスクワに幾留することを許されている。二人の間には思想的にどんな違いがあるのか？　サハロフは共産主義を肯定し、現体制がむしろ共産主義の思想的真実さに無関心になって、きわめて皮相的・観念的にしか共産主義を政治の上に活用していないことを、俗物的であるとして非難している。これに対してソルジェニツィンは、マルクス主義イデオロギーとその背景としての進歩肯定の世界観そのものを否定し、それが現代ロシアの諸悪の根源だとしていることである。

つまりロシア思想史の流れの中において、いつの時代にも存在していた二つの流派、西欧主義とスラヴ主義という母胎の上に立って現代のソ連の思潮を代表する二人の主張が行われ、両派に分れて論争が行われているところに、ソ連はやはりロシアであり、ロシア人が歴史的に常に進歩と保守の二派に分裂することの好例を、私たちは現在眺めているわけである。これは日本にもあった明治初期の欧米主義と、それに反対する日本精神主義・アジア主義と似通ったところもあるが、ロシアの古代文明がキエフに発し、キエフ・ロシアが滅亡してモスクワ・ロシアに発展したために、そして蒙古の征服下にモスクワ・ロシアが「タタール化」し、キエフ・ロシアが「ポーランド化」されてしまったために、ロシア正教の本山がキエフからモスクワかという迷いがまずロシア人の思想の根底にある。

ついでピョートル大帝が首都をモスクワからペテルブルグに移しそこで徹底的なロシアの西欧化を行なった。このピョートル大帝の改革を肯定するのが西欧主義者であり、否定するのがスラヴ主義者だが、ソルジェニツィンは単なる否定ではなく、西欧思想を土着化させたロシア的なものを批判しており、受け入れ方が誤まっているとしているのである。これに対してサハロフは、ピョートル大帝の受け入れ方がよいと言うのではないが、西欧の進歩的思想そのものが正しいからよいというのである。ペテルブルグには、ルイ十四世時代の絶対的専制主義とバロック様式のベルサイユ宮殿の建築様式が輸入され、ライプニッツやヴォルテールの啓蒙思想が普及し、ロシアのドイツ人による「フランス化」が盛んに行われた。ロシアの西欧化がプロイセンのドイツ人を教師として行われたということは、ロシアの近代化を考える上できわめて重要なことであると思う。

そしてこのドイツ的西欧化——カント、ヘーゲルの西欧主義者の流れの中から、トロツキー、レーニンのようにマルクスに傾倒する人々が育ち、革命思想によってペテルブルグは破壊されレニングラードとなった。ソルジェニツィンはそのマルクス主義に反対し、「皮肉なことに西欧ではまだこの破産した教義の支持者がいるが、一度革命を経験したわが国では支持者はほとんど残っておらず、皆信じるとみるのはいささか短絡的でありすぎるばかりか北京での実感とも乖離しすぎているように思う。むしろ「毛沢東以後」の時代への深刻な認識と不安がもたらす一種の凝集力によって、毛沢東の行政的指導能力の低下を補塡すべき実務体制が、ここにようやく整ったと見るべきではなかろうか。中国の新体制には、こうして光と影が重なりあっているのである。

（東京外語大学助教授）

マスコミ十字路

☆東京新聞も定価値上げ

◇…昨年七月、三大紙をはじめ地方各紙も購読料をいっせいに値上げしたなかで、東京新聞だけは八百八十円の定価を据え置いていたが、二月末から三百二十円アップの千二百円にする。当初案では千四百円であったが、読売の名古屋進出が本ぎまりとなり、朝刊オンリーだけれど、五百円という安い単価で販売戦争を展開する。名古屋の中日新聞は東京新聞の親会社である。

◇…読売のおヒザもと、東京で読売その他より五百円安の購読料で、可能な限り読売の読者を食って援護作戦をしようというネライがある。東京新聞の一月末発行部数は九十万ちょっとであるが、各紙が昨夏値上げした直前は、四十八万にすぎなかったから、ほぼ倍増に近い伸張であった。安いということがいかに魅力であるかがわかろうというもの。もっとも近ごろの読者のなかには、テレビとラジオの番組さえ載っておれば、いいという人たちもいるらしいが。

☆毛沢東主席引退の報道

◇…英紙〝デーリー・テレグラフ〟が1月23日紙面で「毛主席は時おり外国からの訪問者と会見しているのは事実だが、これは生きていることを証明するため」であり、実際は引退同様の状況にあると報じた。これは中国を訪問した情報〟の域を出ていない。だが、「反潮流」運動の挫折、私自身も今回北京のTVで見た毛主席の老齢化はいまや争えない事実だとしても、そのことがそのまま毛沢東のカリスマ的権威の低下につながって、「批林批孔」運動の当初の根本精神であった「反潮流」、「反復辟」という言葉は、いまや完全に消滅し、今回の全人代諸報告では、十全大会当時、王洪文報告をはじめとしてあれほど鼓吹された「反潮流」という言葉をついに探し出すことができないのである。しかも、「反復辟」どころか、鄧小平をはじめ新しい国務院人事の大半は「復活」幹部なのである。つまり「反潮流」運動の挫折のあとにこそ、今回の新体制が形成されたのであった。

だが、今回の新体制は、党の一元化指導体制を明白にし、党・軍・政を一元化して形式上は党主席の統帥権が貫徹することになったが、そうしたタテ型支配の構造と実務官僚層の厚いヨコの壁との構造上の矛盾は依然として残らざるを得ない。そして、鄧小平、張春橋といった実務能力にすぐれた党官僚が、毛・周体制下の後継布陣を担うかに見えるのだが、形式上は党主席にすべての権力が集中しているふりをしているにすぎない」と言っている。そして「人々が自由に呼吸することを妨げ、これまで血を流させてきたこのイデオロギーを投げ捨てよ」と主張するのである。

そしてどうするのか？　ソルジェニツィンは西欧の民主主義にも反対で、これは「四年毎にくり返えされる気違いじみた選挙、無節操な報道の横行、キャスティング・ヴォートをもった少数党の横暴」などの欠陥があって支持できない。それよりもロシアでは専制主義がよいというのである。「千年にわたってロシアは専制主義の下にあったが、この専制主義には真正のロシア正教による強固な道徳的基礎があったから、二十世紀初頭でも国民の肉体的・精神的健康が保持されていた。これに対しロシアにおける民主主義は、モスクワ大公国時代の国会、初期のコザック、農村共同体（ミール）等の伝統はあっても、十九世紀知識人の努力は失敗し、二月革命によって成立した臨時革命政府の民主主義も八ヵ月しか続かなかった」

だから「われわれが欲すると欲しないとにかかわらず、ロシアは専制主義の下に運命づけられているのではなかろうか。すべては専制主義の質にかかっている。専制主義が耐え難いのではなく、それらと日々結びついているイデオロギーのうえ、専横、無法などが耐え難いのだ」と言い、「イデオロギーと党の支配を止め、ソビエト（協議するという意味）制度の実権の一部を復活させ、現支配者が求める通りの支配体制をソビエト制度の中に移し、内政上の困難を解決していくことを提案する」とソルジェニツィンは提言するのである。

このように言いながら、彼は階級憎悪に基かない、友愛の専制を「より自由な制度」と呼ぶのであるが、現在のソ連において、すでに共産主義というイデオロギーが、形骸だけの根なし草になっていることだけは、二人の思想家によってはっきりと証言されているように思われる。

（原書房社長）

「不安の時代」を克服するために
3月号　300円 〒24
時の課題
この不安の底には　自己確認のすすめ　原田統吉
不安があるから安心なのだ……　広瀬一郎
この過密社会を生き抜く法　土田隆
老齢化社会が急ぎ足でやってくる　宮部タキ
現代若衆宿考　稲積謙次郎
第五次中東戦争の噂と石油戦略
中東問題とユダヤ人たち　野島嘉晟
外交にみる「挑戦」と「応戦」…　田久保忠衛
東京都港区芝虎ノ門8　虎ノ門実業会館
五〇二・〇五七一（代）　時事問題研究所

改革者
現代日本のタブー
学者首長への幻想　富田信男
現代日本のタブーに挑戦　関野英夫
日共対〝解同〟戦争の真相　殿岡昭郎
所得政策導入の提言　重枝琢己・矢島鈞次
3月号　200円（送20）

対談　全人大と毛周体制のゆくえ　中嶋嶺雄　柴田穂
講座　新しい産業社会と青年労働者問題〈上〉　芳賀綏
共産党〝親警〟作戦の背景　鈴木卓郎
大新聞に直言する　高木道弘・寺嶋泰
東京都渋谷区神南一—二〇—六／☎（四六三）五二七〇
民主社会主義研究会議